

OPERA
PALACE

Tokyo
オペラパレス

オペラパレスへようこそ

2010/2011 SEASON OPERA

尾高忠明 芸術監督就任新シーズン開幕公演

《新制作》



平成22年度(第65回)
文化庁芸術祭主催公演

2010年 **10/2**[土]2:00 **5**[火]3:00 **8**[金]6:00 **11**[月・祝]2:00 **14**[木]6:00 **17**[日]2:00

【全3幕/ドイツ語上演/字幕付】

アラベッツ



R. シュトラウス

Richard Strauss

Arabella



新国立劇場

オペラパレス — OPERA PALACE

◎特別協賛: JR東海

ボックスオフィス

2010 / 2011 シーズン・特別支援企業グループ

TBS

TOYOTA

ぴあ

03-5352-9999

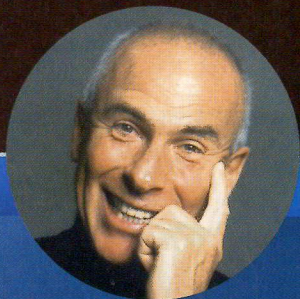
<http://www.nntt.jac.go.jp/opera/>

運命の人との愛を夢見る美人姉妹の恋物語

尾高忠明オペラ芸術監督の就任第1作となる、2010/2011 シーズンオペラの開幕公演は、観た人すべてが幸せな気持ちになれる、愛すべき喜劇『アラベッラ』。19世紀後半のウィーンの貴族社会を舞台に、2人の姉妹アラベッラとズデンカ、それぞれの恋愛模様が、R.シュトラウスならではの甘美で洗練された音楽で描かれる珠玉の名作です。歌手にとっては、演技、歌唱ともに高度なテクニックを要求される作品ですが、アラベッラには本場ドイツでも定評のあるミヒャエラ・カウネ、マンドリカには09年『ヴォツェック』タイトルロールの記憶も新しいトーマスヨハネス・マイヤーなど、実力派の歌手が勢ぞろいしました。正統派ドイツ音楽の数少ない継承者の一人ウルフ・シルマーの指揮、“光の魔術師”アルローの煌めく舞台、新国立劇場初登場となる世界的ファッションデザイナー・森英恵による華麗な衣装と豪華な布陣で挑む、この秋期待の新制作です。



ウルフ・シルマー



フィリップ・アルロー



森 英恵

指揮:ウルフ・シルマー

Conductor : Ulf Schirmer

演出・美術・照明:フィリップ・アルロー

Production,Scenery,Lighting Design : Philippe Arlaud

衣裳:森 英恵

Costume Design : Mori Hanae

ヴァルトナー伯爵:妻屋 秀和

Graf Waldner : Tsumaya Hidekazu

アデライデ: 竹本 節子

Adelaide : Takemoto Setsuko

アラベッラ:ミヒャエラ・カウネ

Arabella : Michaela Kaune

ズデンカ:アグネーテ・ムンク・ラスムッセン

Zdenka : Agnete Munk Rasmussen

マンドリカ:トーマス・ヨハネス・マイヤー

Mandryka : Thomas Johannes Mayer

マッテオ:オリヴァー・リングエルハーン

Matteo : Oliver Ringelhahn

エレル伯爵:望月 哲也

Graf Elemer : Mochizuki Tetsuya

ドミニク伯爵:萩原 潤

Graf Dominik : Hagiwara Jun

ラモラル伯爵:初鹿野 剛

Graf Lamoral : Hatsukano Takeshi

フィアッカミッリ:天羽 明恵

Die Fiaker-Milli : Amou Akie

カルタ占い:与田 朝子

Eine Kartenaufschlägerin : Yoda Asako

合唱指揮:三澤 洋史

Chorus Master : Misawa Hirofumi

合唱:新国立劇場合唱団

Chorus : New National Theatre Chorus

管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団

Orchestra : Tokyo Philharmonic Orchestra

芸術監督:尾高 忠明

Artistic Director : Otaka Tadaaki

主催:文化庁芸術祭執行委員会/新国立劇場

※やむを得ない事情により出演者等が変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。



妻屋秀和



竹本節子



ミヒャエラ・カウネ



アグネーテ・M・ラスムッセン



トーマス・J・マイヤー



オリヴァー・リングエルハーン



望月哲也



萩原 潤



初鹿野 剛



天羽明恵



与田朝子

【あらすじ】 没落貴族のヴァルトナー伯爵には、2 人の娘、アラベッラと男の子として育てられているズデンカがいる。美しいアラベッラには士官マッテオなど多くの求婚者があるが、誰にも関心がない。彼女の元に資産家の甥マンドリカが現れ、お互いに一目惚れ、将来を誓い合う。密かにマッテオを愛するズデンカは、彼を慰めようと姉の部屋の鍵と偽り自分の部屋の鍵を渡す。マンドリカはアラベッラの不貞を疑うが、ズデンカが真実を告白、ズデンカとマッテオ、アラベッラとマンドリカは結ばれる。

Arabella 台本:フーゴ・フォン・ホフマンスタール 作曲:リヒャルト・シュトラウス Libretto by Hugo von Hofmannsthal Music by Richard Strauss

新国立劇場オペラ芸術監督よりのメッセージ

私が芸術監督に就任する、2010/2011シーズン開幕公演に選んだのは、敬愛する二人のリヒャルトの一人、リヒャルト・シュトラウスの「アラベッラ」です。このシーズンではオペラの様々な“愛”の形について取り上げていこうと考えています。「アラベッラ」で繰り広げられる恋愛模様は、姉妹愛や片思いが入りまじり、とても楽しい喜劇に仕上がっています。指揮者としても名高いR.シュトラウスの音楽は、主役から脇役に至るまで、音の中にきめ細やかに心情描写が織り込まれ、色彩豊かなオーケストラとともに、華麗な音の世界を築いています。また、演技、歌唱ともに高いテクニックを求められる歌手陣には、非常に実力のある方々が揃いました。ことし、ヨーロッパで「アラベッラ」を集中的に指揮していっしょやる、シルマー氏の指揮とあわせ、私も大変期待をしております。そして、アルロー氏の演出・美術、森英恵氏の衣裳の美しさにも酔いしれていただきたいと思います。ウィーンでは「アラベッラ」といえば、誰もが微笑みを浮かべる、素敵で幸せな気分になる作品です。新国立劇場の新たなシーズンの幕開けを、笑顔で迎えていただきたいと思います。

尾高忠明

アラベッラという静寂のまわりで……

「リヒャルト・シュトラウスのオペラの中でどれが一番好き?」とよく訊かれる。僕はいつもちょっと考えてから「アラベッラ」を挙げた。本当は「迷いなく!」挙げた方がよかった。でもそんな時、僕の心の中にはあの「ばらの騎士」の元帥夫人の、今日か明日かに自分の恋、あるいは自分の青春が突然終わってしまうのではないかと密かにおののく寂しげなまなざしがちらついていた。そのまなざしには存在の希薄さが漂っている。でもやっぱりアラベッラのまなざしの方がいい、と気を取りなおして「アラベッラ」を挙げる。アラベッラが元帥夫人と決定的に違うのは、彼女が自分の目の前に現れるであろう王子様 Der Richtige (自分にふさわしい者)に対する憧憬を胸に持っていること。つまり「アラベッラ」は希望に溢れたポジティブな作品。ハッピー・エンドのラプストリー。それ故にもしかしたら「ばらの騎士」の方が優位に立てしまうのかも知れない。人は悲劇を好むものだから。「ばらの騎士」の経験を踏まえて周到に練られた「アラベッラ」の方が全ての面において良く出来ているのに……。元帥夫人とアラベッラとはとても似ている。それは“自らが行為者でない”点において。二人とも、他者に積極的に自分の想いをぶつけて人生を無理矢理にでも変えていこうとはしない。それどころか全てにおいて受動的であり、一見人生に何も望んでいないようにすら感じられる。しかしながら、物語はその主人公を巡って激しく展開していく。何故か?それは、行為こそしないが彼女たちにはとても強い“想い”があるから。そして想いは具現化していく。シュトラウスと台本作家ホフマンスタールの二人は、静かだが深い想いが運命を変えていく物語を常に作り出してきた。だからアラベッラのまわりには静寂がある。そのたたずまいはシュトラウスの豊饒な管弦楽の響きに支えられ、と、何ともいえない漂とした気品を醸し出

アラベッラ 衣裳プランより

す。それゆえに他の役は対照的に行為者として生き生きと際立つ。まさに台風の目のまわりで嵐が荒れ狂うごとくである。妹のズデンカのマッテオに対する熱い想いに触れて、我々は彼女こそ主役ではないかと思う。痛々しいほど切ない恋心!そこに聴衆は感情移入する。そのマッテオのアラベッラに対する見当はずれの愛も作品に溢れるようなエネルギーを供給する。アラベッラの父親であるヴァルトナー伯爵は没落した貴族だが、賭け事に没頭し現実逃避をしている。彼の打算の浅はかさに、我々はあきれのを通り越して微笑んでしまう。そして積極性においては、なんと言ってもクロアチアの大富豪マンドリカの情熱につきる。それが怒りに変わった時のすさまじさ!でも、それらの「濃い」登場人物達のキャラクターや彼らが起こす事件の全てが、実はアラベッラの美しさを際立たせるためにあるのだ。「ばらの騎士」終幕の三重唱と元帥夫人の「引き際」の圧倒的效果を身をもって体験したシュトラウスとホフマンスタールの二人は、最後の合作である「アラベッラ」において、今度は百パーセントの確信をもって終幕の「水の入ったグラスのシーン」を創造した。階段の上から静かに一段一段降りながら歌うアラベッラ。自分の全てをマンドリカに捧げようとする一瞬、彼女は初めて自分の意志による行為者となる。その瞬間、世界は止まり、アラベッラは女王となる!シュトラウスは、ワーグナー風ライト・モチーフの使用をさらに発展させていく一方で、ワーグナーが意図的に避けたアリア風のメロディーに浸ることに決して躊躇しない。いや、それどころかどこまでも耽溺する。まさにその点において彼はワーグナーを凌駕したのだとも言える。第一幕のアラベッラとズデンカの二重唱を聴いてみるがいい。この美しさに酔い痴れ、この時が永久に続けばいいと思ってしまうとしたら、あなたはすでにシュトラウスのオペラの醍醐味を手に行っている!

新国立劇場合唱指揮者
三澤洋史

指揮:ウルフ・シルマー

ドイツのエッセンハウゼン生まれ。2009年8月より、ライプツィヒ歌劇場の音楽監督を務めている。オペラのみならず、オペレッタ、映画音楽など幅広いレパートリーを持ち、世界各地の著名なオーケストラの指揮で活躍。ハンブルク演劇アカデミーで、音楽分析と音楽ドラマトゥルギーを教えている。新国立劇場には 03 年『フィガロの結婚』、04 年『エレクトラ』、07 年『西部の娘』に続く4度目の登場となる。

演出・美術・照明:フィリップ・アルロー
パリ生まれ。ストラスブール国立劇場演劇大学で演出、舞台美術、美術史を学ぶ。これまでにパリ・オペラ座など世界の一流歌劇場などで演出、舞台美術、照明を手がける。新国立劇場では03年『ホフマン物語』演出・美術・照明を担当。“光の魔術師”の異名にたがわぬ鮮烈な視覚効果で、作品の幻想性を浮き彫りにした。05 年『アンドレア・シェニエ』に続く3作目の新演出。

衣裳:森 英恵

1950 年から60 年代にわたって多くの日本映画衣裳を担当。65 年ニューヨークで初の海外コレクションを発表、77 年からパリ・オートクチュール組合に属する唯一の東洋人として活動を展開した。オペラやバレエ、創作能、新作歌舞伎などの舞台衣裳も手がける。現在は「森英恵ファッション文化財団」を設立し、若手の育成にも力を注ぐ。新国立劇場初登場。
アラベッラ:ミヒャエラ・カウネ
ハンブルク生まれ。1997 年よりベルリン・ドイツ・オペラに所属。ザクセン州立歌劇場、パリ・オペラ座、バイエルン州立歌劇場、ザルツブルク音楽祭などに出演。『カルメン』ミカエラ、『魔弾の射手』アガーテ、『フィガロの結婚』伯爵夫人、『アラベッラ』タイトルロール、『ルサルカ』タイトルロール、『ばらの騎士』元帥夫人などをレパートリーとしている。新国立劇場初登場。

ズデンカ:
アグネーテ・ムンク・ラスムッセン
コペンハーゲン生まれ。同市の王立音楽アカデミーに学ぶ。これまでにザクセン州立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、ベルリン・ユーミッシェ・オーバーなどに出演。『ばらの騎士』ゾフィー、『アラベッラ』ズデンカ、『ナクソス島のアリアドネ』ウェルビネッタ、『魔笛』夜の女王、『ラインの黄金』ヴォークリンデ、『こうもり』アデーレなどを歌っている。新国立劇場初登場。

マンドリカ:
トーマス・ヨハネス・マイヤー
ドイツ生まれ。ケルン音楽大学で声楽を学ぶ。ミラノ・スカラ座、バイエルン州立歌劇場、パリ・オペラ座、ハンブルク州立歌劇場などに出演。『ワルキューレ』ヴォータン、『ジークフリート』さすらい人、『ドン・ジョヴァンニ』と『ヴォツェック』のタイトルロール、『ドン・カルロ』ロドリゴなどを歌っている。09 年に新国立劇場に『ヴォツェック』タイトルロールで登場、大好評を博す。

マッテオ:オリヴァー・リングエルハーン
オーストリア生まれ。ウィーン音楽大学に学ぶ。これまでにザクセン州立歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭などに出演。『アラベッラ』マッテオ、『ニュルンベルクのマイスタージンガー』ダーヴィット、『フィデリオ』ヤッキーンズ、『こうもり』アルフレード、『ヴォツェック』アンドレスなどを歌っている。新国立劇場初登場。

2010年 平城京遷都 千三百年